

未来洗浄研究会セミナー
サステナブルな洗濯を考える(8)ー これまでとこれから

未来洗浄研究会は2024年4月4日に第8回セミナー「サステナブルな洗濯を考える(8)ーこれまでとこれから」を開催しました。企業関係者や研究者など100名を超える方にご参加頂き、花王株式会社の金子洋平氏による総合司会のもと、これまでの第1回からの活動を振り返り、持続可能性の視点で様々な課題や取り組みについて議論しました。

はじめに、フューチャー・アース日本ハブ事務局長 / 長崎大学大学院教授の春日文子氏より、開会の挨拶ならびに未来洗浄研究会設立の経緯とその趣旨、そして洗濯の多様性や地球環境との関わりにおけるこれまでの活動について説明がありました。

続いて、花王株式会社の金子洋平氏より、未来洗浄研究会におけるこれまでの5年間の活動の振り返りがありました。真にサステナブルな洗浄を行う、すなわち、「世界中の人々がサステナブルに清潔に快適に暮らせる社会」を目指すためには、水や資源、エネルギーの使用などの環境的・技術的側面のみならず、個人の価値観や地域の文化、また各国での衛生意識や洗濯事情の違いなど個人の価値観や地域の文化など、洗濯にまつわる様々な面について考慮すること、そしてジェンダー、世代、職業にかかわらず、多様な背景を持つ人々との議論の場が必要であるということが、未来洗浄研究会の発足(2018年)に至ったことを紹介しました。また、洗濯を(1)ライフサイクル、(2)社会環境、(3)多様性の3つの視点から捉えることの重要性を述べました。続いて、これまでの活動がこの3つの視点に基づいて、アカデミア、国際機関、企業、コミュニティ、若者など異なるバックグラウンドを持つ人々を巻き込み、行われてきたことを説明しました。また、これまでのセミナーを通じて、未来の洗浄を考える上での要素として、(1)バックキャストिंग、(2)広い視野、(3)オープンイノベーション、(4)技術革新、(5)生活者の行動変容を挙げました。

次に、東京大学大学院工学系研究科 教授の沖大幹氏より、「水と洗浄と持続可能な開発」というタイトルでご講演いただきました。はじめに、国際連合(国連)の持続可能な開発目標6「水と衛生」について、単に飲み水、トイレの有無のみならず、手洗いなど生活を衛生的に保つ水へのアクセスは、貧困からの脱出と命を守る点で重要であると述べられました。関連して、各国の乳児死亡数と生活用水取水量について、さらに日本における水道普及率に伴う水系伝染病患者数ならびに乳児死亡数について説明されました。続いて、2030年までの国連持続可能な開発目標6の達成における現状と課題、そして各ステージ(サービスレベル)における「安全に管理されたならびに基本的な飲料水」の提供達成状況について述べられました。すなわち、安全に管理された飲料水ならびに基本的な飲料水

の提供は大きく改善した一方、未だに表流水を利用せざるを得ない人々があります。さらに、「成長の限界」について、サーキュラーエコノミーや資源の再利用の重要性に触れる一方、世界人口の推移（定常化）という視点から、若い世代の環境問題等への積極的な取り組みが必要になってくるということについても言及されました。また、「成長の限界」を超えて、プラネタリーバウンダリー（地球の限界）についても説明されました。その中で、地球環境にかかる負荷とともに、人類が健康的な生活を送るうえで必要不可欠（最低限）の負荷“Access Foundation”についても述べられました。最後に、水から持続可能な社会の実現を支えるために、日本の水状況（1964年のオリンピック渇水や近年のインフラ老朽化など）について説明し、あらゆる水源はもちろん、その確保・維持管理に携わっている行政、受給者など多彩なステークホルダーを含めた水の供給の仕組み全体が安心、安全な飲料水の提供を支えているという意識を根付かせること、そして我々自身がその仕組みの維持という役割の担い手であるということから、「水 みんなのインフラ＝水みんフラ」という政策研究を紹介されました。

次に、花王株式会社 ESG 活動推進部長の高橋正勝氏より、「花王と洗淨～これまでとこれから～」というテーマで講演がありました。まず、花王の原点、石鹼について触れました。その後、花王 Way として策定している企業理念の下、130年にわたってよきモノづくりを通じて清潔と衛生に取り組み、「豊かな共生世界の実現」を目指している事を説明しました。続いて、花王の環境調和活動として、河川での発泡問題などについて、洗剤のソフト化（生分解されやすい界面活性剤へのシフト）など原料の改良や、現在に至るまで継続的な河川での界面活性剤のモニタリング調査について紹介しました。さらに、プラスチック循環社会に向けた取り組みとして、新規プラスチック削減のためのリデュースイノベーション（つめかえ、つけかえ、コンパクト化：およそ80%ものプラスチック削減量達成）、また廃棄プラスチック削減に向けたリサイクルイノベーション（循環洗淨技術、高強度再生技術）について言及しました。また、製品使用時の泡切れ技術の開発による節水や少ない水での洗淨力を可能とするための取り組みについて述べました。そして環境負荷を小さくする取り組みに加え、人口増加などの急激な社会変化、あるいは生物多様性の視点も含め、原料としての天然資源（アブラヤシなど）を大切に使う（無駄のない）ことの重要性について述べました。最後に、花王のサステナブル商品開発方針として、“Maximum Value with Minimum Waste”なモノづくりについて説明し、持続可能な社会に向けて、「社会経済；量、大量消費→質、循環」「洗淨：清潔・衛生、美・健康→こころ豊かなくらし」「地球環境：環境負荷を小さく→天然資源を大切に」に「連携・共生」して取り組んでいくことが必要であるとしました。

続いて、これまでの活動を踏まえ、東京大学未来ビジョン研究センター 教授である菊池康紀氏をファシリテーターとして、「未来の洗淨」についてパネルディスカッションが行

われました。パネリストには、本日登壇したフューチャー・アース日本ハブ事務局長 / 長崎大学大学院教授 春日文子氏と花王株式会社 ESG 活動推進部長 高橋正勝氏、一昨年に講演した北海道大学環境健康科学研究教育センター センター長 / 北海道大学大学院保健科学研究院 教授 山内太郎氏、昨年ご講演いただいたアクアスフィア・水教育研究所、武蔵野大学 客員教授 橋本淳司氏、そして若者代表として三年前にご登壇いただいた一般社団法人 SWITCH 代表 佐座マナ氏が参加されました。

はじめに、各パネリストの方より自己紹介をいただきました。次に、菊池氏が、コロナ下における除菌に関する衛生観など価値観の変化に続き、社会におけるカーボンニュートラル、ネイチャーポジティブなどのグリーン・トランスフォーメーションなど社会変革の必要性が増してきたことについて触れ、これらの社会情勢と洗浄との関係について各パネリストに対し考えの共有を求めました。これに対し、佐座氏は、コロナ禍において除菌などの行動が定着している一方で、若者の気候変動への認識がまだ低いことや、それに対する意識・行動が欠如していることに警鐘を鳴らし、教育の重要性を訴えられました。

駐在先のヨーロッパにおいてコロナ下のロックダウンを経験した高橋氏からは、需要が増え原料が不足する状況において、洗浄剤の供給を通じた衛生への貢献というエッセンシャルワーカーとしての責任を感じた、との回答が寄せられました。これに対し、菊池氏からは原料が不足する中での生産状況について質問がありました。高橋氏から当時世界的にエタノール原料が不足する中で、洗浄剤メーカーとして供給責任を果たすために苦労したとの回答がありました。

橋本氏は、パンデミック下の日本国内では手洗いの頻度と徹底度が上がり、手指の消毒が感染予防として普及した結果、商業施設に消毒液など衛生設備が設置されたりなど、個人の衛生意識に関わらず、習慣是正を促した社会の変化について紹介がありました。その中で、継続性、今後の感染症対策そして健康意識向上という観点から、習慣化したもののメリットを追究することの必要性を述べられました。一方で、免疫低下や環境への負荷など、過剰に洗浄を行うことのデメリットも挙げられました。

菊池氏より山内氏に対し、衛生意識・行動の普及・定着が求められる世界各地の現状や対応策について、質問がありました。山内氏は、はじめに、橋本氏によるコロナ下の日本の衛生状況に関連して、途上国では都市のみならず農村でも簡易な衛生設備の設置が進められたと同時に、それが日常生活における優先順位が高い別の喫緊の課題（マラリアなど）によって、一過性ものになってしまうことへの懸念を示しました。さらに、今は人類史上最も子どもの数が多いという事実（特にグローバルサウス）について述べ、衛生意識・行動変容のためには、未来世代である子どもと若者の力を借りること、先進国と途上国を繋げていくことの必要性に触れました。最後に社会変革のためには、意識、そして行動の変

容が求められること、そのためには教育はもちろん、人々が問題を我が事として考えることが必要であり、ボトムアップアプローチの重要性に言及しました。

これを受けて、菊池氏より春日氏に対し、国際的な連携、ネットワークを通じて、どのようなことができるのかという質問がありました。春日氏より、グローバルサウスの声を組み込むこと、そしてグローバルサウスのみならず、グローバルイーストの実情を科学アジェンダの中に組み込んでいくことへの取り組みについて紹介がありました。さらに、生物多様性の変化、生態系の変化、気候変動、地球温暖化がそれぞれ人間の活動と繋がっているように、パンデミックを通じて地球環境と人間の相互関係を捉えなおすこと、そのためには地球、生態系の健康と健全性、人の健康と健全性を包括的に考えること、すなわち「プラネタリーヘルス」が必要である、との発言がありました。最後に、コロナ下での全世界での迅速な危機感の共有について触れ、気候変動問題の意識的、協力的な取り組みの可能性について言及がありました。

最後に、菊池氏より、未来洗浄研究会を通じて構築されたネットワーク、プラットフォームを通じて、今後どのようなことができるのか、何をすべきなのかという点について、各パネリストに対しコメントを求めました。高橋氏は、洗浄にまつわる様々な課題に対応するための、企業や分野を越えた全体視点での連携の重要性について述べました。佐座氏は、「やればできる」というパワーを具体的な行動に移す方法について述べました。そして、そうした行動変容（ムーブメント）を起こすために若者の力が不可欠であり、若者を積極的に洗浄に関する「対話」に巻き込む必要性を強調しました。橋本氏は、未来の洗浄として、サーキュラーな水の使い方を考えること、そして、それには洗浄の位置づけ（利他的な洗浄、排水）といった、別の考え方（定義）をすることの必要性について述べられました。山内氏は、洗浄とは水、トイレ、衛生（Water, Sanitation, and Hygiene: WASH）を包含するきわめて重要なものであることを再認識するとともに、地球環境問題といった大きな物語を考えるには、個人の小さな物語（個人の衛生や事例）を考えることの重要性、さらに、それをスケールアップさせることに加えて、各地域固有の文脈に沿った文化を醸成すること（テイラーメイド）、すなわち、「スタンダード→テイラーメイド」という発想の転換がポスト SDGs に求められることについて述べました。そして春日氏より、地球環境問題を「わかりやすく」伝えることの重要性、「小さなこと→大きなこと」を日常生活に結び付けることの必要性について発言があり、締めくくられました。

上記パネルディスカッションを踏まえて、東京大学未来戦略 LCA 連携研究機構 シニアリサーチフェローの平尾雅彦氏より、まとめをいただきました。未来洗浄を考える視点として、「バックキャストिंग」「広い視野で考える」「オープンイノベーション」「技術革新」「生活者の行動変容」を挙げ、本日の議論から、「水みんフラ（我々自身が担い手）」「豊

かな共生世界（絶えざる革新）」「分野を超えた共同」「ボトムアップでの変容」「サーキュラーな水使い」「若者世代」「ムーブメント化」「危機感の共有」などのキーワードが挙げられました。最後に、地球全体の課題としての気候変動問題を、一人ひとりが我が事として包括的に捉え、多様なバックグラウンドを持つ人々と協働して取り組むことの重要性について触れ、締めくくられました。